あすへの話題

2019・6・12

元気象庁長官　西出　則武

正常化の偏見という魔物

昨年7月の豪雨災害の後、報道でも時々取り上げられて、耳にしたことがある方も多くなっているかもしれない言葉がある。「正常化の偏見」あるいは英語の直訳的に「正常性バイアス」という。

人は明日死ぬかもしれないなどと考えない。なんとなく、明日も平穏無事で、天寿を全うする、と意識しているわけではないが、無意識にそのように思って生きている、という。確かに、いつもそんなことを考えていたら、寿命が縮んでしまいそうである。

そのため、いざ危険が身に迫ってきても、平凡な人生が続くと思っている思考回路からなかなか抜け出せない。その結果、避難しなければならない状況にもかかわらず、自分は大丈夫と思い、それに合う情報だけを集め、合わない情報は無視してしまう。

昨年の災害をみても、あのような激しい災害が迫っているのにどうして避難しなかったのだろうかと首を傾げたくなるような事例が散見された。はたから見ると何とも不合理で明らかに間違った判断をしている場合があるのである。

被災地でのインタビューでは必ずといってよいほど、「こんなに降るとは思わなかった」「生まれてこの方、一度もなかった」といった声を聞くが、それで今回も大丈夫だという理由にはならない。これまで経験したことのないような事態だと言っているではないか。

このことを非難するつもりはない。これが人間の性であり、自分にもその性があるということを自覚して、災害が迫ってきているときに、自分の判断が本当に正しいのか、今一度考えてほしいと思っている。